

SHOW HEY シネマルーム

★★★

キープ・クール (有話好好説 / KEEP COOL)

1997年・中国映画・95分
配給 / 角川書店、ドラゴン・フィルム

2003 (平成15) 年11月30日鑑賞
＜ホクテン座・中国映画特集＞

Data

監督：張藝謀 (チャン・イーモウ)
出演：姜文 (ジャン・ウェン) / 李保田 (リー・パオティエン) / 瞿穎 (チュイ・イン) / 劉信義 (リュウ・シンイー) / 葛優 (グオ・ヨウ) / 趙本山 (チャオ・ベンシャン) / 張藝謀 (チャン・イーモウ) / 李雪健 (リー・シュエチエン)

👁️👁️ みどころ

張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督が、1997年の現代北京を舞台に、2つの「三角関係」をストーリーの軸とし、「人間の狂気」をテーマに描く異色作。舞台、テーマ、カメラワーク、音楽、女優、どれをとっても異色だがちょっと凝りすぎ・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

＜キープ・クールとは？＞

この映画の原題は「有話好好説」。これはつまり、理路整然とした会話を進めていくことによって、話をまとめていこうよ、という意味。この映画の原作となったのは、平凡な1人の人間が犯罪を犯すまでに追い詰められていく心理や人間の凶気を描いた現代小説だが、映画化にあたってはこれをいろいろ脚色したとのこと。

ところが邦題は「キープ・クール」。すなわち、英語でいう「KEEP COOL」だから、「冷静さを保て！」という意味。この邦題は、この映画が人間の「凶気」をテーマにしていることがわかってはじめて、「なるほど」と納得できるが、映画を見るまではなかなかわかりにくい。

そういえば昔のミュージカルの名作『ウエスト・サイド物語』(1961年)の中に「クール (COOL)」という曲があった。この『ウエスト・サイド物語』はニューヨーク・マンハッタンのウエスト・サイドに移住していた多くのプエルトリコ人の若者たちがジェット団とシャーク団に分かれて抗争する姿を現代版「ロミオとジュリエット」ともいえるべきスタイルで描いたもの。そしてこの作品の中でジェット団のリーダーが仲間たちに対して、「Boy, boy, crazy boy, Get cool, boy!」、「Cool・・・

go・・・crazy・・・cool・・・go・・・」呼びかけるヒットナンバーが「クール」(COOL)だ。

ああ、懐かしい・・・。

<ケッタいな主人公は露天商のシャオ>

ケッタいな露天商の主人公、趙小帥(チャオ・シャオ)を演じるのは姜文(チアン・ウエン)。張藝謀監督の監督デビュー作である『紅いコーリャン』(1987年)で主演して以来、2度目の張藝謀監督とのコンビだ。姜文は『太陽の少年』(1994年)や『鬼が来た!』(2002年)など多数の作品に出演している中国ナンバーワンの俳優。

この姜文が、女に振られたうえ、恋敵からボコボコに殴られて、「凶気」に走るものの、「有話好好説」によって最後はやっと「クール」な人間に変身していく、というシャオの難しい役柄を見事に演じている。そういえば姜文が第六世代監督の陸川(ルー・チュワン)の作品で主演した『ミッシングガン』(03年)の主人公は拳銃を失った警官で、これも人間の凶気を真正面から描いた作品だった。ひょっとしてこれは、この『キープ・クール』を参考にしたのかもしれない・・・。

なお姜文が自ら監督・主演した『鬼が来た!』は政府の許可なしにカンヌ映画祭に出品されたため、中国国内では上映できず、姜文は今後10年間中国国内で監督することはできないと言われているとのことで心配だが・・・。

<ヒロインのアンホンはトップモデルの瞿穎(チュイ・イン)だが・・・>

張藝謀監督は、そのデビュー作『紅いコーリャン』以後、『菊豆』、『秋菊の物語』、『活きる』と鞏俐(コン・リー)とのコンビ作品が続いていた。そしてまた、「しあわせ三部作」と名付けられた、『あの子を探して』、『初恋のきた道』、『至福のとき』では、それぞれ魏敏芝(ウェイ・ミンジ)、章子怡(チャン・ツイイー)、董潔(ドン・ジエ)という若手新人女優を発掘してデビューさせ、卓抜した女優探しの能力を世界に見せつけた。

しかし、この作品では珍しく鞏俐(コン・リー)ではなく、中国で有名なトップモデルの瞿穎(チュイ・イン)を起用した。彼女は1991年に中国のスーパーモデルコンテストで第2位に選ばれ、その後企業広告やテレビのプレゼンター、音楽活動など様々な方面で活躍している美人女優とのこと。たしかに美人は美人、しかし・・・。

<ヒロインの扱いはちょっと・・・?>

この『キープ・クール』では、はっきり言ってヒロインの存在感は薄い。出番自体も少ないし、男たちに与えている影響もさほど明確に見えてこない。さらに後半はシャオとチャンとの会話とドタドタ劇がメインとなり、瞿穎演ずるアンホンは全くスクリーンに登場しない。

アンホンは北京市内の高層・高級マンションに母親と2人で住んでいるが、そのファッションセンスや生活振りから見て、あまり真面目なお嬢さんではなく、どうも適当に男を渡り歩いている感じ・・・？もっとも、本人はチャンから「娼婦」と呼ばれて立腹していたから、根は真面目なのかもしれないが・・・？とにかく、1997年の北京のまちの若い女の子ともなると、どんな女かサッパリ分からないのも当然か・・・？

そして、アンホンは最初にちょっとドキッとさせる印象を与えるものの、それっきり。シャオとヨリを戻し、食事からイザ・・・という流れも、残念ながらチャンの登場によって断ち切れ、いいとこなし。このようにこの映画では、ヒロインの扱いがちょっとかわいそう・・・？

<シャオの恋敵の(ドロン・劉)もちよっとヘン?>

アンホンの新しい(?)恋人は、高級クラブを経営する大金持ちの劉徳龍(ドロン・劉)(劉信義)。もっともストーリー展開上それが分かるのは、アンホンにつきまとうシャオが、劉とその手下たちによってボコボコに殴り倒されるシーンから。

このドロン・劉は最初はカッコいいものの、後は凶気のシャオに迫りかき回されるだけで、まるでカタなし。そしてやっぱりちょっとヘンな奴・・・？

<初の試みその1、舞台は現代北京>

張藝謀監督の映画は、初期の『紅いコーリャン』(87年)、『菊豆』(90年)、『紅夢』(91年)など、古い時代の古い因習に対する痛烈な風刺作品が多い。『活きる』(94年)も大河ドラマだが、その批判精神は強烈だった。また、日本で「しあわせ三部作」と名づけられた『あの子を探して』(1999年)、『初恋のきた道』(2000年)、『至福のとき』(2002年)はすべて舞台は田舎の農村であり、古き良き時代の心温まる人間の物語だ。

しかし、この『キープ・クール』だけは違う。張藝謀監督初の試みとして、この映画の舞台は目ざましい発展をとげる現代都市北京。しかも設定された時代は1997年だから、冒頭に登場してくるヒロインのファッションやヒロインの住む高層マンションも超現代的。いままでの張藝謀監督の作品とは全く異質なものだ。

振られたアンホンを追っかけるシャオとこれを振り切って逃げていくアンホンの姿は北京のまちにマッチしてスピーディ。さらに超ミニのワンピース姿で自転車に乗って逃げていくアンホンの姿はかなり刺激的・・・？

2003年の11月1～4日にはじめて北京旅行に行き、通常のツアー観光で見る天安門広場や万里の長城の他、北京西駅や三里屯の盛り場などを見聞してきた私が、11月30日に、この映画を観ることができたのも何かの因縁か・・・？

<もう1人の主人公のチャンは知識人・・・?>

シャオが劉にボコボコに殴られた時、このトラブル(?)に巻き込まれて、買ったばかりの大切なパソコンをつぶされたのがチャン・チウション(張秋生)(李保田/リー・パオティエン)。彼はシャオとは全く違う知識人のインテリ(?)。どこに住み、何をしているのか映画では全くわからないままだが、つぶされたパソコンの弁償交渉のためだけにシャオと接触する。

殴られたシャオは、通りすがりのチャンがもっていたパソコン入りのバックを取り上げて反撃したため、そのパソコンが電柱にあたってつぶれてしまったらしいが、もちろんシャオはそんなことは全然覚えていない。パソコンは97年の北京ではまだ1万円(約14万円)もする高級品。「その賠償責任はシャオにある」と説得して、その弁償を迫るインテリのチャンの主張と、「そんなこと知らん! 弁償は劉にしてもらえ」と反論するシャオの主張は全く平行線。法的にどちらの主張が正しいのかの判断はかなり微妙だが、チャンが警察沙汰にせず、あくまで話し合いで冷静に(?)解決しようとするのはご立派……。

<2つの「三角関係」>

この映画の前半は、女1人(アンホン)をめぐるシャオと劉との三角関係。そして後半は男3人の三角関係。男3人の三角関係のキーパーソンはチャン。つまり、チャンのパソコンの損害賠償(被害弁償)をめぐる三者の凶気のぶつかりあいという三角関係だ。チャンは劉に対しては、凶気を帯びたシャオの復讐を避けるためにも、あくまで冷静な交渉で一定の金銭賠償をして解決すべきと説得する。そして、「その際パソコンの弁償金もあわせて……」とチャンは劉を説得して、劉にこれを了解させた様子。

そこで、チャンはこの合意内容を文書にしてシャオに伝えに来たが、そのタイミングが最悪だった。すなわち、やっとシャオがアンホンとヨリを戻し、デートが終わって部屋に戻り、ムード音楽が流れる中で乾杯を交わし、いよいよコト(?)に及ぼうとしていた時だった。シャオの部屋の外から機関銃のようにしゃべりまくるチャンに対して、シャオはやむなく「すべてまかせる」と回答したが、せつかくの男女2人のムードはしらけきっていた。いやはや残念でした……?

<食堂でのシャオとチャンの会話とドタドタ劇は絶品>

今日は、チャンの仲介によって、シャオと劉が示談金5万円(約70万円)(うち2万円はパソコン代として、チャンの取り分)を支払って示談書を交わす日。

包丁を持って劉のナイトクラブまで殴り込み、警察沙汰にまでなったシャオが、やっとチャンの理性的な話を聞き入れてくれたことでチャンは大満足……。のはずだったが、実はそうではなかった。劉から殴られたことについてのシャオの恨みは、もっと根深いものだった。何とシャオは、今日は自分の顔を殴ったにつつき劉の手を包丁でたたっ切るためにここに来ていることがわかったのだ……。この食堂でそんなことをやられたのでは、

ここまで合意形成の努力を重ね、やっとそれを実現してきたチャンの努力は水のアワ。何とかシャオが凶気に狂うのを阻止しようと、何度も何度もチャオを説得するが・・・。

もっともシャオもチャンがこういう示談の場を設けてくれたことを感謝していた。それは劉の手を包丁でたたく切ったタイミングと場所が設定できたためだ。そして、「もはやお金はどうでもいい」という心理状態になっているシャオは、その感謝の気持ちを込めて、新しいパソコンを買ってチャオに渡すべく持ってきていた。だから本来ならチャンは、そのパソコンを受け取りさえすれば、シャオと自分との関わりはおしまいになるはずだったが・・・。ところがここからチャンにも変な親切心が・・・。つまりシャオが劉に対して凶気のままに復讐することはシャオのためにならないと考えて、これを何とか止めようとしたのだ。そこでチャンは今度はやむなくさまざまなパフォーマンスを・・・。ここから展開されるすさまじいドタバタ劇は、まさに人間の凶気のおすごさがよくわかる面白いもの・・・。

<ハンドカメラを使ったカメラワークの功罪は？>

張藝謀監督は、この映画ではハンドカメラにこだわっている。だから、この映画のカメラワークは張藝謀監督の作品中ではきわめて異色。このカメラワークについて、パンフレットのあとがきに、張藝謀監督は「ハンドカメラを好むのは俳優の表情をアップで撮れるし、ハイコントラストな照明が可能になり更にはスピーディな映像が撮れるからです。型破りの編集をすることで現代中国の印象を映し出していきました。」と述べているが、はっきり言って私はこの撮り方は好きではない。アップになったからといって特別どうということはないし、画面が大きくブレるのは見ていてすごくしんどいもの。ハンドカメラを多用した映画としては『アレックス』(02年)や『イン・ディス・ワールド』(03年)等があるが、私はどうもこの手のやり方は苦手・・・。

<初の試みその2、音楽もロック>

張藝謀監督の映画は、音楽も印象に残る美しいものが多い。『紅いコーリャン』、『菊豆』、『秋菊の物語』、『紅いコーリャン』の音楽は趙季平(ツァオ・チピン)が、『あの子を探して』、『初恋のきた道』の音楽は三宝(サン・パオ)が担当したとのことだが、これらはいずれも哀愁をおびた美しいメロディであり、ハイライト場面で涙を流すのに絶好の音楽だった。また最新の大ヒット作『HERO(英雄)』(03年)の音楽も印象的だった。

しかし、この『キープ・クール』では、中国ロック界の重鎮、臧天朔(ザン・ティエンシュオ)を起用。冒頭からノリのよいロック音楽が流れてくるのは極めて異例なら、エンディング曲も現代的・・・。

しかしやっぱりオーソドックスな張藝謀監督の音楽の方が私は好き・・・。

<この映画は張藝謀監督の遊びか・・・？>

きっとこの映画は張藝謀監督のちょっとした遊び心でつくったものだろう。そう思うほど他の作品とは異質のもの。

そして私はハッキリ言って、この手の作品はあまり好きではない。たしかに後半のシャオとチャンのやりとりは迫力があるし、ドタバタ劇がおさまった後のストーリーの結末のつけ方にも納得できるが、前半のアンホンをめぐる三角関係の描き方は平凡だし、何よりもヒロインが輝いていないのが気に入らない。

『HERO (英雄)』(03年)は張藝謀監督がハリウッドに進出してつくった超大作だが、CG (コンピューター・グラフィックス) を多用すると聞いて、『マトリックス』のようなつまらない(?) 映画になるのではないかと心配していたが、その出来を見るとすばらしいものだったので、安心することができたが、張藝謀監督には、やはり「しあわせ三部作」のような、素朴に人間の心を感動させる映画を期待したい。

2003 (平成15) 年12月1日記